

令和5年6月1日（毎月1回1日）発行 昭和43年1月10日第3種郵便物認可

MICHISHIRUBE

みちしるべ

No.895

2023

6

June



Contents

砂地から岩盤へ／榎本吉邦.....	3
感染は外から？中から？／水野信輝.....	4
この意味教えて（カタカナ篇） No.18 エクレシヤ／広沢 規.....	8
最初の隠蔽／白井達也.....	10
エジプトでの神様の救い／松橋聖幸.....	13



☆当月号および過去1年分のみちしるべを、電子書籍版にてご覧頂けます。 <https://e-michishirube.com>

砂地から岩盤へ

榎本吉邦



先日、愛知県美浜町にある海岸で砂の造形をする機会がありました。バイブルキャンプのレクリエーションの一環です。それぞれのグループに分かれて相談し、お城など色々な物を造りました。

私のグループは亀を造ったのですが、甲羅を大きくしたせいで、砂を積み上げるのが大変でした。大人は汗だくになり、その後の筋肉痛を心配しつつ、約二時間がんばりました。おかげで、五、六人甲羅に乗っても大丈夫なくらい大きな亀が完成し、子どもたちは喜んでいました。

ところが、砂浜を元通りにするというルールがあり、わざわざそんなことをしなくても波風ですぐに元に戻ってしまうだろうと思いつつ、せっかく苦勞して作り上げた亀を崩して平らにしました。その作業には十数分しかかかりませんでした。少し悲しい

気持ちがありました。

このように物造りは楽しいですが、そこには知恵と力が必要です。人はいろいろな物を作ってきました。車やテレビ、電子レンジ、コンピュータ、スマホなど、賢い人はたくさんいるものだと感じます。

ところで、私たちの周りにはたくさん生物がいます。植物や動物を研究している学者が、見つけた機能性のすばらしさを紹介してくれる番組などは、わくわくしながら見ます。それらはたいいてい「進化」という言葉とともに紹介されるのですが、進化論の出発点は偶然です。しかし生物の機能性と躍動する生命力を知れば知るほど、それらの機能が偶然に出来る上がるとはとても思えません。

偶然というものに何かの力があるとすると砂上の楼閣のような理論ではなく、岩盤のように固い、創造主のことば（聖書）に謙虚に耳を傾け、ご自分の人生をお考えになれますよう、お勧めします。

「天地は消え去ります。しかし、わたし（神）のことばは決して消え去ることがありません。」

（マタイの福音書24章35節）

感染は外から？

中から？

水野信輝



新型コロナウイルスの感染が拡大してから3年が経ちました。当初は世界各国で非常に厳しい対策が取られていましたが、弱毒化したこともあり、次第に通常の生活に戻りつつあります。日本でもマスクについてのルールが緩和され、5類に引き下げられるなど、徐々にその影響は小さくなっています。それでも、完全に元の生活に戻るにはもう少し時

間がかかりそうです。

私たちはなぜ感染対策をするのでしょうか？それは、ウイルスから身を守るためです。完全に防ぐことはできなくても、できるだけその影響を最小限に抑えようと努力するのです。

ところで、聖書の中には、ウイルスと同じよう

に、悪いものから身を守ろうとした人たちが出てきます。次の聖書のことばは、そうした事情をよく説明しています。（※冒頭のパリサイ人とは、ユダヤ社会の宗教的指導者のことです。）

「パリサイ人をはじめユダヤ人はみな、昔の人たちの言い伝えを堅く守って、手をよく洗わずに食事をするのではなく、市場から戻ったときは、からだをきよめてからでないと食べることをしなかつた。ほかにも、杯、水差し、銅器や寝台を洗いきよめることなど、受け継いで堅く守っていることが、たくさんあったのである。」

（マルコによる福音書7章3、4節）

今から約2千年前、ユダヤ人たちは食事の前に手を洗ったり、また、市場から帰った時はからだを洗ったり、食器を丁寧に洗ったりしていたようです。まるでウイルス対策に消毒しているようですね。

なぜこのようなことをしていたかという点、今でいう感染対策のためではなく、宗教的な目的のため

でした。世の中には悪が満ちており、汚れた物や人がたくさんいるので、このような儀式を行うことで、自分たちをきよく保とうとしたのです。

一方、イエス・キリストの弟子はそれをしていなかったもので、彼らはそれを指摘しました。すると、イエス・キリストは次のように言われました。

「外から人に入って来るどんなものも、人を汚すことはできません・・・人から出て来るもの、それが人を汚すのです。内側から、すなわち人の心の中から、悪い考えが出て来ます。淫らな行い、盗み、殺人、姦淫、貪欲、悪行、欺き、好色、ねたみ、のしり、高慢、愚かさで、これらの悪は、みな内側から出て来て、人を汚すのです。」（同18〜23節）

イエス・キリストは、私たちが汚れてしまう原因は外にはなく人の心の中にあるのだ、と言われました。

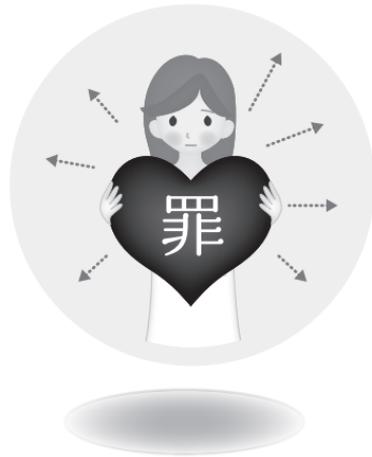
私たちはどうして悪いことを考えたり、してしまったりするのでしょうか。嘘をついたり、人をね

たんだり憎んだり・・・ある人は、育った環境が悪
いからそういうことをするのだと言われるかもしれ
ません。もちろん、そういった外的な影響もあると
思いますが、温かい、平和な家庭で育ったとしても、
(実際に行動に移すかどうかは別として) 上記のよ
うな悪い考えが浮かんでくることがあるのです。

聖書は、私たちの心の中にあるそのような性質を
「罪」と呼んでいます。そしてその罪はすべての人
の心の中にあり、様々な悪い考え、憎しみや争いを
生み出すのだと教えています。

ウイルスのように外側から入ってくるものであれ
ば、対策をすれば自分を守ることができます。しか
し、罪は内側にあるものなので、どんなに外側を防
御し、悪いものから遠ざかり、正しい行いを心がけ
たとしてもなくなることはありません。それどころ
か、この罪は私たちに悲しみと死をもたらすもので
あると聖書は教えています。

では、私たちはその罪にどのように対処すればよ
いのでしょうか。イエス・キリストは言われました。



「医者が必要とするのは、丈夫な人ではなく病人
です。わたしが来たのは、正しい人を招くためでは
なく、罪人を招くためです。」

(マルコによる福音書2章17節)

もし病原菌が私たちの体の中に入ってしまったな
ら、専門のお医者さんに診てもらって、内側から治
療をしてもらわなければなりません。同じように、

罪という私たちの心の中にある問題も、それを治すことができる医者にかかる必要があります。そして、それができる医者が唯一、イエス・キリストなのです。

人となられた神であるイエス・キリストは、今から約2千年前、この地上に生まれ、十字架刑という、歴史上稀に見る残酷な刑にかけられて死なれました。でも、それはイエス・キリストに罪があったからではありませんでした。

当時、イエス・キリストの裁判を担当したローマ人の総督ピラトは、このように証言しています。

「私はあの人に何の罪も認めない。」

(ヨハネによる福音書18章38節)

それでは、なぜ裁判官ですら罪を認めなかった方が、十字架にかけられたのでしょうか。聖書はその理由について次のように書かれています。

「(キリストは)自ら十字架の上で、私たちの罪をその身に負われた。」(ペテロの手紙第一・2章24節)

自分の子どもや家族、大切な人が病気で苦しんでいるとき、私たちはその苦しみを自分が身代わりになんてあげたいと思うことはないでしょうか。

イエス・キリストは、私たちに対してそのような思いを抱き、私たちの罪を一人ですべて引き受け、私たちの身代わりとなって十字架にかかってくださったのです。すなわち自らのいのちを犠牲にして、すべての人が罪という病気から救われる方法を用意してくださったのです。

もし私たちがイエス・キリストの十字架の死の意味を知り、この方を救い主と信じ受け入れるなら、ユダヤ人が行っていた儀式による形式的なものではなく、本当の意味で罪がきよめられるのです。

ぜひ、この方についてさらにお知りになり、真の救いを経験する方とされますように。



この意味教えてーカタカナ篇ー

広沢 規^{のり}

No.18

● エクレシヤ

ある時、イエス様は弟子たちに、「あなたがたは、わたしをだれだと言いますか。」(マタイの福音書16章15節)と尋ねました。するとペテロは、「あなたは生ける神の子キリストです。」(同16節)と答えました。するとイエス様は彼に、「わたしはこの岩の上に、わたしの教会を建てます。」(同18節)と言いました。

これはイエス様が、初めて「教会」について語った箇所です。この対話から、「イエスは生ける神の子キリストです」と告白した人たちの集まりが教会であることが分かります。

ところで、教会という言葉の原語は、「エクレシヤ」になります。その意味は、「何か目的があつて呼び出された人たちの集まり」となります。当時の社会では、普通に「集会」「議会」「集まり」を意味する言葉でした。ところが、イエス・キリストの福音(良い知らせ)が広まるにつれて、クリスチャンの集まりをエクレシヤと呼ぶようになりました。それで、エクレシヤは、教会よりは「集会」と言う方が、本来の意味を正しく伝えることになります。また、今日、道を尋ねるときに、建物である教会堂(集会所)のことを、教会と言う



ことでもあります。教会は建物ではなく、あくまでもクリスチャンの集まりのことです。

ところで、クリスチャンは、みな神の子供という立場を与えられて、神の家族の一員となります。そして、お互いに兄弟姉妹の關係となりますので、親しみを込めて「○○兄弟」とか「○○姉妹」と呼び合います。それで、クリスチャンは信仰の道を一人で歩むのではなく、主イエスの御名のもとに一緒に集まります。

さて、クリスチャンの歩みが始まると、地域集會が主催している定期集會に集います。共に神様を礼拝し、賛美します。共に聖書を学び合い、祈り合います。また、お互いに勧め合ったり、励まし合ったりします。そして、神様の救いを人々に紹介します。その結果、信仰者として健全な成長を遂げるようになります。皆様も、イエス様を信じ受け入れて、このキリストの集會に加わりませんか。

最後に、クリスチャンとして歩み始めたいけれど、何をしたら良いのか分からないと思っ

方に、信仰の生活を支える大切な四つの柱を紹介いたします。

① 毎日の生活の中に、聖書を読んでじっくり考える時間を確保します。神様のみこころをより正しく知るために、聖書を根気よく学び続けます。

② 神様に祈りをする習慣を身につけます。祈りは、神様を賛美したり、願い事を伝えたりする大切な行為です。神様と会話をする幸いなひと時です。

③ 所属する地域集會が、開催している定期集會や特別集會などに集います。地域集會に参加しながら、神様の奉仕者として尊い働きに与ります。

④ 集會を活かして、周りの人たちにクリスチャンであることを証しします。

もし、すでにイエス様を信じ受け入れているならば、信仰の歩みを始め出す決心をしてください。神様が愛されているエクレシヤに加わってください。

最初の隠蔽いんぺい

白井達也



ニュースなどは、連日のように犯罪事件が報道されていますが、刑法犯罪の認知件数については、近年減少傾向にあるようです。警察庁の発表によると、令和3年度は前年に引き続き、戦後最少を記録したそうです。(ただ、令和4年度は前年比より5.9%増加)

その一方で、インターネットを利用したサイバー犯罪は増加傾向を示しています。インターネットでは個人情報隠すための匿名性が高く、それが人の言動を攻撃的にし、SNS上でのトラブルを引き

起こしている様子も見られます。こうした匿名性は、プライバシーの権利を守る上では大切なものである一方、犯罪を隠す手段にもなります。

このように人が悪いことをしてしまう心理と、自分を隠そうとする心理は深く結びついているように思われます。

● 聖書には、神様が最初の人アダムとエバが造られたことを記しています。そして彼らが蛇(サタン)にそそのかされて、神様から食べてはいけないと命

じられていた、「善悪の知識の実」を食べてしまい、その時から人間に罪が入ったことも記されています。罪が入った時、人が初めて行った行動は、次のことでした。

「彼ら（アダムとエバ）は、神である主が園を歩き回られる音を聞いた。それで人とその妻は、神である主の御顔を避けて、園の木の間に身を隠した。」

（創世記3章8節）

このように、罪が入ってしまった人間が最初に行ったことは、神様の前に自分を隠すことでした。それが、都合の悪い事柄を隠す行為、隠蔽の始まりと言ってもいいかもしれません。

しかし神様は、私たちのすべてを知っておられる方であり、神様の前では隠し事や言い訳が通用しません。

「神の御前にあらわでない被造物はありません。神の目にはすべてが裸であり、さらけ出されています。」

す。この神に対して、私たちは申し開きをするのです。」（ヘブル人への手紙4章13節）

その後二人は神様に見つかり、事の次第を問われます。その際、アダムはエバに勧められたから、と言いつきをし、エバは蛇に惑わされたからと、やはり言いつきをします。このように彼らは、その責任を逃れるように、神様の命令に背いた原因を他人のせいにしてました。

しかし神様は、犯した罪に対して厳正にさばきを下される方です。元凶ともいえる蛇に対して真っ先にさばきの宣告をされましたが、蛇にそそのかされ、罪を冒したアダムとエバにも罰（出産の苦しみ、労働の苦しみ、肉体の死）を与え、エデンの園から追放されました。

この世界では、法に裁かれず野放しにされている悪事もあるかもしれません。また、私たちの感覚では罪に問われないことでも、神様の基準では、罪とされることも多くあるのです。ですから、聖書はどんなに小さな罪であっても、死後に必ずさばきが下

され、死よりも苦しい罰が与えられると告げています。

● ここまでの話だけを聞くと神様は恐ろしい方であり、厳しい方であるように思われるかもしれません。しかし神様は厳格であると同時に、愛のある方であり、神様に対して罪のある私たちでさえ愛してくださる方です。

アダムとエバは神様の信頼を裏切り、神様をひどく悲しませる行いをしました。その結果、彼らは祝福に満ちたエデンの園から、いばらやあざみの生えた土地へ追放されました。

しかし、その際に神様は二人を気にかけて、あるものを与えました。

「神である主は、アダムとその妻のために、皮の衣を作って彼らに着せられた。」（創世記3章21節）



このように神様は、厳しい世界で生きていくことになる二人に、寒さをしのぎ、裸の恥をおおうことができる、「皮の衣」を与えられたのです。

この現代社会で生きている私たちも、かつてのアダムとエバのように罪ある者として、神様から離れて生きています。

しかし神様は、罪を冒した私たちを直ちに滅ぼすことをせず、日々生きるために必要なものを与え、生かしてくださっています。そして、再び自分のもとに私たちが立ち返ることを望んで待っておられるのです。

私たちが神様のもとに戻る道筋は既に与えられています。それがキリスト・イエスによる十字架の贖あがないなのです。どうかこの神様の素晴らしさを知り、救いを受ける方となりますように。

エジプトでの神様の救い

松橋聖幸



今年の3月、エジプトのピラミッドについて書かれているニュースの記事がふと目に留まりました。首都カイロ近郊ギザにあるクフ王のピラミッド内部に通路のような空間が見つかったというのです。世界最大とも言われるピラミッドから未知の空間が発見されたのは実に186年ぶりということで、構造の解明に繋がるのではないかと期待されています。

それを読んだとき、旧約聖書の世界と重なる話だと感じました。エジプトはその当時の世界で、もつとも繁栄していた国でした。「創世記」の後半から「出エジプト記」の前半にかけて、

物語の重要な舞台ともなっています。イスラエル人はエジプトで400年にもわたり寄留していたからです。ピラミッド建設にはそのイスラエル人も関わっていたという説もあります。そこで、そのエジプトにおけるイスラエル人の歴史を通して、神様の救いの働きについて考えてみたいと思います。

今から3千5百年以上も前のお話になりますが、当時、中近東全域で大きな発生し、イスラエル人の先祖となるヤコブとその家族は、食料が豊富なエジプトに引っ越して、そこで新しい暮らしを始めます。最初は70人ほどの少な

い人数だった彼らを、エジプトの民は快く受け入れてくれました。(創世記46、47章)

しかし、年月が経過すると次第に彼らの数も多くなり、そのことはエジプトとしても看過できない状況になってしまったのです。そしてエジプト王はイスラエル人たちを奴隷として働かせることにしました。(出エジプト記1章)

イスラエル人たちは毎日厳しい環境の中で労働を強いられました。王が彼らを奴隷として扱ったのは苦役で苦しめるためであり、移住してきた弱い立場のイスラエル人たちは反抗することはせず、ただ自分たちの信じる神様に祈ることしかできませんでした。

神様は彼らの苦しみを見て、その叫びを聞いておられました。そこで、モーセという人物がイスラエル人たちを救うために神様から導かれます。神様はモーセにこのようなことを話されました。

「わたしは、エジプトにいるわたしの民の悩みを確かに見、追い使う者の前の彼らの叫びを

聞いた。わたしは彼らの痛みを知っている。」

(出エジプト記3章7節)

モーセは先陣を切って民を導き、神様の守りの中でエジプトから脱出することになります。彼らの祈りは確かに聞かれたのです。

□

私たちも当時のイスラエル人たちと一緒に生きていくと必ず困難なことや苦しい出来事に直面します。誰かに相談したり、助けてもらえるのならそれも良いかもしれませんが、いつもそれが可能であるとは限りません。簡単に助けを求められない状態や状況に置かれることもあります。

しかし神様は私たちの悩みや苦しみを見逃されることなく、決して私たちを見捨ててはなさいません。人間は生まれながらに神様を知ることはありませんが、神様はいつでも私たちに目を向け、その声に耳を傾け、日頃の様子

を気にかけてくださいます。神様はエジプトで奴隸として苦しい生活を送っていたイスラエル人たちの叫びを聞かれ、彼らを苦しみから解放していただきましたが、同様に私たちの叫びにも耳を傾け、必ず脱出の道を備えてくださると聖書は約束しています。(コリント人への手紙 第一・10章13節)



今から約2千年前、イエス・キリストがこの地上で働かれた時代にも、様々な悩みや苦しみをもち人が大勢おりましたが、イエス様はそのような一人一人に真摯に向き合われました。またこの方は人々に優しく接して下さっただけではありません。神様のもとから遠く離れ、罪のさばきへと向かっている私たちが、そこから救われるようにと、自ら十字架にかかって下さったのです。

「人がその友のためにいのちを捨てるという、

これよりも大きな愛はだれも持っていません。」
(ヨハネの福音書15章13節)
イエス様はこのように語られ、自らのそのことを実行されたのです。

神様は、かつてモーセを通してイスラエル人を救われましたが、現在は、このイエス様によって、罪の奴隷となっている私たちを救い出してくださいます。イエス様は、救い主としてこの地上に来られた神の御子であり、神様の愛は、どのような罪深い人にも注がれているのです。

まだ聖書をお読みになったことがない方は、ぜひ手に取っていただき、このイエス様について知っていただけると嬉し



みちしるべ6月号 第895号

令和5年6月1日(毎月1回1日)発行

発行所 伝道出版社

〒183-0056 東京都府中市寿町2-8-9

TEL 042-366-7760

FAX 042-366-7790

編集人 伝道出版社 編集部

<https://dendoshuppan.shop-pro.jp/>

印刷所 株式会社 共同印刷所

「有言実行」と言えば、少し前に話題になりましたが、WBC(国際野球大会)で日本の優勝に大きく貢献し、MVP(最優秀選手)に選ばれた大谷選手を思い出される方も多いのではないのでしょうか。彼は、高校生の時に書いた人生設計シートに「WBCに日本代表で出場してMVPを獲る」と書いていたそうです。まさに有言実行と言える素晴らしいことだと思います。

私たちは、自分の努力だけでなく、取り巻く環境や他の人の協力があれば、ある時には有言実行が出来るかもしれません。しかし、人には限界があり、何か妨げが起これば実行出来なくなります。言ったことを必ず実行する、必ず成し遂げる、それが本当に出来るのは、何からも影響を受けることのない神しかおられません。聖書に次のように書かれています。

「わたしの口から出るわたしのことばも、むなしく、わたしのところに帰っては来ない。必ず、わたしの望む事を成し遂げ、わたしの言い送った事を成功させる。」(イザヤ書55章11節)

神は、聖書を通してご自身が言われたことを必ず実行する方です。「イエス・キリストによる救い」こそ、神がまさに有言実行された事実です。人の考えや願いや努力によってではなく、神が私たちを愛して望まれ、イエス・キリストによって成し遂げられたこの救いを、どうぞ受け取って下さい。

(好本 豊)

なお、くわしく聖書について知るために、下記の所へぜひおいでください。

